書評

『災害と防災－これまでと今　これまでと今』
志岐常正著，本の泉社，2018 年 12 月，A5 版，277 ページ，1800 円+税

奥西一夫

本書は災害に関するすべての事項に言及しているという点で，佐藤・奥田・高橋の「災害論」（1964）以来のものであると言えよう。もちろん，その後の 54 年の歳月の経過を反映して，内容は全く新しくなっている。語り口は一般人向けである。

第Ⅰ章で災害の定義を提示した後，第Ⅱ章で各種の自然災害について述べている。これらの章を読んだ国土研会員は，新味がないとして，特別の感慨を抱かれないかもしれない。あるいは，共感するとしても反発するとしても，いくつかの部分に注目されるかもしれない。評者がこのように推測する背景が２つある。ひとつは第Ⅰ章で災害の主要因を自然的素因，自然的直接因，社会的素因，社会的直接因，の４つとしていることである。これは第Ⅳ，Ⅴ章の記述とはかなり異なる印象を与えるもので，国土研会員は若干の違和感を感じられるかもしれない[注)]。今一つは立脚点で，著者は地質学の専門家であるが，地質学が「複雑系」を対象とする科学であることから，「複雑系の科学」という切り口を通じて他の学問分野に積極的に関与してきたことが，第Ⅱ章で自然災害の今日的課題が総括的，かつ簡潔にまとめられている所以であろう。しかし，問題を単純化，理想化して理論的に扱おうとする，例えば力学系の専門家からは，いくつかの部分について反発されてもやむを得ないことであろう。

第Ⅲ章「社会的要因による災害（人災）」は 19 ページと短かく，公害を取り扱っていないが，今日的課題を的確，かつ簡潔にまとめている。当然，佐藤・奥田・高橋（1964）とは取り上げるトピックスが異なるが，最近はこのような総括を眼にすることが少ないので貴重である。ただ，評者としては，この章は「社会災害」と銘打ってほしかった。著者がそうしなかったことには「人災」の考え方がからんでいるように思われるが，これについては本書の記述を参照されたい（念のためにこれだけは断っておくが，著者は自然災害を天災だとは見なしていない）。

第Ⅳ章「災害論　何をどう考える」では，「災害は社会現象であって」という言葉から始まる昨今の大上段の災害論とは異なり，人類文明の危機と最近ののっぴきならぬ災害問題を掲げながら，誰にも分るような形で災害論の本質に切り込んで行っている。第Ⅴ章「防災　何をどうするか」では，いわゆるハウツー物ではなく，防災論の基本的な考え方が，やはり誰にも分るような形で示されている。そして第Ⅳ章と第Ⅴ章を通じて災害というものの本質が次第に分ってゆくようになっている。このあたりは著者の話り口の真骨頂とでも言うべきであろう。ちなみにシンポジウムや会議などで著者が意見を開陳される時，多くの人が「何を言おうとしているのかも，何について言おうとしているのかも分らない」と感じることがある。話が飛び過ぎるからである。評者は本書でもそのようなことが起きていないかと，恐るおそる本書を読み始めたのであるが，これは全くの杞憂であった。

注）本書では第Ⅳ章になって初めて，佐藤・奥田・高橋（1964）以来の災害の「厳密な」定義を踏襲している。自然科学分野の研究者の間では未だに自然的，社会的要因を並列，対等に見る傾向があることや，災害問題の専門家でない読者のことも考え，第Ⅱ章ではあえてこのような古い考え方から出発したのであろう。